

16. Cushing 病9例の手術治療

黒木 瑞雄・田中 隆一 (新潟大学脳研究所)
 脳神経外科
 横山 元晴 (新潟大学医学部)
 第一内科
 谷 長行 (新潟大学歯学部)
 歯科放射線科
 土屋 俊明・伊藤 寿介 (新潟大学総合病院)
 脳神経外科
 宮澤 登 (新潟大学総合病院)
 脳神経外科

経蝶形骨洞下垂体手術を施行した Cushing 病9例の経験から、診断および手術に関する問題点につき検討した。9例の内訳は女性5例、男性4例で平均年齢は34.1才であった。術前の内分泌検査では通常の Cushing 病と異なり ACTH が持続的低値を保つ例や、デキサメサゾン抑制試験で少量で抑制されたり、また大量でも抑制されない例がみられた。レ線学的検査ではトルコ鞍多層撮影で4例に変化がみられ、CT では8例に腺腫を直接証明することが可能であった。そのうち microadenoma は6例で5例が側方に偏在した。中に海綿静脈洞内に腺腫が存在した例があり、術前に腺腫の局在をできるだけ明確にしておくことが重要であると思われた。術後8例に高コルチゾール血症の改善が得られたが、腺腫の extensive resection を加えなかった1例が1年後に再発した。従って手術は腺腫境界部を含めた腺腫の切除が必要であると考えられた。

17. GH 産生下垂体腺腫の組織培養における免疫組織学的検討

井上 明・山田 潔忠 (山形大学医学部)
 脳神経外科
 中井 昂

acromegaly 6例の腫瘍組織培養を行い、カバーガラス上に継代し、培養液中 GH および PRL 濃度を測定、培養細胞をアセトン固定後、HE 染色と酵素抗体法による GH および PRL 染色を行ない、顕微鏡的に観察した。

【結語】

1. 酵素抗体法を用いた GH および PRL 染色は GH 産生下垂体腺腫の培養腫瘍細胞を同定するのに比較的容易で有効な方法である。
2. 酵素抗体法による陽性細胞数と培養液中のホルモン濃度は、ある程度相関する。
3. GH 産生下垂体腺腫で、術前の PRL 値が正常範囲にあるものでも培養液中 PRL 値が上昇し、且つ、PRL 陽性細胞が認められる例があることは興味深い。今回は呈示しなかったが、2例の正常下垂体の培養の経験では継代後の培養液中ホルモンは、いずれも検出されず、酵素抗体法でも陰性であることより、正常下垂体の

contamination とは考えにくい。おそらく PIF の影響のない培養下で腫瘍細胞より分泌されたと考えられる。

18. Bromocriptine 抵抗性高プロラクチン血症症例におけるプロラクチンゲル濾過分画の動態

坂本 哲也・石野 裕子 (秋田大学脳神経)
 脳神経外科
 峯浦 一喜・古和田正悦 (秋田大学脳神経)
 脳神経外科
 長谷川祐人 (同産婦人科)
 福島 峯子 (同産婦人科)
 脇坂 晟 (同第1生化学)

目的: プロラクチノーマと機能性高プロラクチン血症例の中にプロモクリプチン (Br) 療法に抵抗性を示す例があり、臨床上問題である。その機序解明の目的で、血清 PRL とそれらのゲル濾過分画動態を解析した。

方法: 術後も高プロラクチン値を示した macroadenoma 5例、microadenoma 2例と、非手術 microadenoma 5例、機能性高プロラクチン血症7例に Br を投与し、血清 PRL を ultro gel AcA 44を用いたゲル濾過クロマトグラフィで分析した。

結果: macroadenoma 2例、microadenoma 2例、非手術 microadenoma 2例、機能性高プロラクチン血症4例に Br 抵抗性をみた。Br 投与前のゲル濾過分画は低分子型 PRL が主体であり、投与後には減少または消失した。しかし抵抗例では高分子型 PRL が残存あるいは増加した。

結論: Br 投与にもかかわらず、血清 PRL が正常化しがたい理由は、高分子型 PRL の増加によるものと考えた。

19. ラットプロラクチン産生腺腫に対するプロモクリプチン (BC) の影響—*in vitro* チュブリンの重合に及ぼす BC の影響—

丹羽 潤・大坊 雅彦 (札幌医科大学)
 脳神経外科
 田辺 純嘉・端 和夫 (札幌医科大学)
 脳神経外科
 水無瀬 昂・森 道夫 (同第二病理)

BC が PRL 産生腺腫に作用して血中 PRL 値を低下させるが、この時 BC は PRL 産生細胞の細胞質微小管を減少させることによって、PRL 顆粒の細胞外への放出を抑制する可能性があることを昨年の本学会で報告した。しかし、BC が微小管をどのような機序で減少させるのかは明らかではない。今回我々は、Shelanski の方法によりブタの脳から微小管を構成するチュブリン蛋白を抽出し、それらに直接 BC を作用させて、チュブリンの重合能に及ぼす影響について検討し、興味ある結果を得たので報告する。